

小規模小学校に求められる総合的な学習の時間の一考察

—— 映画制作プロジェクトを手がかりとして ——

A Consideration of Period for Integrated Study Required for Small Elementary School :

Using a Movie Production Project as a Clue

中山 義之

NAKAYAMA Yoshiyuki

(和歌山市立加太小学校)

谷 尻 治

TANIJIRI Osamu

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

2021年9月6日受理

Abstract

This study considered the efforts required of small elementary schools based on the issues of our school, “Curriculum open to society” and “Guide for proper scale and placement of public elementary schools and junior high schools”. In period for integrated study, a movie production project was launched, and nine children took the initiative in script production, shooting, editing, and screening. In the process, there was a variety of support from the local people, and interaction between the children and the local people progressed, resulting in a change in the children’s views on the region. Using this practice as a clue, we have summarized the results of our study into four points, focusing on the possibility of developing educational activities in collaboration with small schools and the community.

キーワード：小規模校、社会に開かれた教育課程、総合的な学習の時間、地域資源、映画制作

1. はじめに

筆者の1人である中山が務める現任校(以下、本校)は、全校児童53人、複式学級1クラス、特別支援学級2クラスを含む全7クラス(2021年度)の小規模小学校(以下、小規模校)である。本校の児童数は、2000年度216人、2010年度141人、2020年度54人と減少傾向が続いている。このような児童の減少傾向は本校だけの問題ではない。日本全体に目を向けても、全体的な傾向としては人口減少社会をむかえている。川上(2015)¹⁾は「多くの地域では学校の小規模化に直面し」、その対応としては「従来型の学校機能を維持できるだけの学校規模を求めて統廃合を進める」、または、「小規模化に対応できるよう、学校機能の再検討をはかる」の2種類であると述べている。また、加藤(2015)²⁾は、「人口減少社会にあって、一方では従来通り、数の論理を優先に、また標準規模を理想として単純に統廃合の対象と捉えられる小規模校もあれば、他方で地域の存続という一種のミッションともいえるべき課題と結びついて積極的な存続維持の対象となる小規模校もある」と推測している。中山は、小規模校に対しては課題もあるが、さまざまな「可能性」もあると捉えている。また、和歌山市が本校などを対象として小規模校の存続維持の

方策である「小規模特認校」³⁾制度の検討を開始している現状がある。したがって、先にふれた加藤の「存続維持の対象となる小規模校」の教育課程を探究したい。ただ、中山自身は学校教育現場の教師であるので、本稿では教育経営の観点から探究するのではなく、あくまでも学校教育における取組として何ができるのかを考え、その取組を通して小規模校の教育課程はどうあるべきかを考えたい。

2. 小規模校に求められる取組

ここでは、まず小規模校に対する社会的要請と一般的課題について確認し、次に本校を事例校として児童の課題について考察する。そして、それら考察したことをもとに小規模校に求められる取組を仮に設定する。

2.1 社会的要請

初めに、小規模校の一般的な課題と小規模校に求められていることを確認する。

まず大前提として、現行(平成29年告示)学習指導要領について確認する。現行学習指導要領は、小学校では2020年度より実施され、そこでは、「社会に開かれた教育課程」の理念が強調されている。「社会に開かれた

教育課程」³では、次の3点が重要であると示されている。それは、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有」すること、「これからの社会を創り出していく子供たちに必要な資質・能力とは何かを明らかにし、それを学校教育で育成」すること、「地域と連携・協働しながら目指すべき学校教育を実現」することである。

次に小規模校における一般的な課題と小規模校に求められていることについて、文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」⁴で確認する。ここでは、小規模校を存続させる場合、「教育の機会均等とその水準の維持向上という義務教育制度の本旨に鑑み、小規模校のデメリットを最小化し、メリットを最大化する方策を計画的に講じる必要があります。」(下線、中山)と指摘されている。そして、小規模校のメリットとしては、「異年齢の学習活動を組みやすい、体験的な学習や校外学習を機動的に行うことができる」ことや、「地域の協力が得られやすいため、郷土の教育資源を最大限に生かした教育活動が展開しやすい」(下線、中山)ことなどが挙げられている。また、小規模校のデメリットを解消したり、緩和したりする方策としては、「学校教育活動への地域人材の効果的な参画を促進して、社会性を涵養する機会を確保すること」、「多様な意見に触れさせるために、保護者や地域住民の参画を得て、国語や総合的な学習の時間等でパネルディスカッション等を実施する」(下線、中山)などが挙げられている。

また、本校が小規模特認校の対象校であることを考え、「小規模特認校」制度にも着目する。「小規模特認校」制度導入校での学びが子どもの成長を促進する要件について、久保(2015)⁵は、「学校・教室内の教育活動における特色づくりだけでなく、自然環境・歴史的・文化的環境などの地域資源(人材を含めた)をフルに活用する教育課程づくりが必要」と指摘している。

これらのことから、本校のような小規模校には、次のことが求められていると考えた。

- (1)「社会に開かれた教育課程」の具現化
- (2)体験学習・校外学習の効果的活用
- (3)地域人材を効果的に活用し、児童の社会性を涵養させる機会の確保

2.2 事例校(本校)について

本校は和歌山市の北西、紀淡海峡に面した地域(一般に「加太」とよばれている)にある。校区に海や山が広がり、自然環境が豊かな場所に位置する。学習活動は地域と連携した活動が色濃くあり、例えば、伝統文化である獅子舞の取組、地場産業である漁業に関連した「お魚つかみ」や、「干物教室」の取組などがそれらの活動である。

2.3 事例校児童の課題(資質・能力)

本校児童の課題について、平成31年度「全国学力・学習状況調査」の児童質問紙をもとに考察する(対象児に対する「令和2年度全国学力・学習状況調査」はコロナ禍のため悉皆調査が行われなかった)。ここで、全国平均との比較において肯定的な回答(当てはまる、どちらかといえば当てはまる)が最も低かった項目は、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか?」という項目である。一方、否定的な回答(当てはまらない、どちらかといえば当てはまらない)の割合が最も低かった項目は、「今住んでいる地域の行事に参加していますか?」という項目である。このことから、本校の課題は、「児童は、地域の行事への参加は高いものの地域のことを自分事として考える姿勢がやや弱い」と考える。

資料1 本校児童の回答

平成31年度「全国学力・学習状況調査」 児童質問紙より(2019年4月18日実施)
《今住んでいる地域の行事に参加していますか》 肯定的な回答 100% (全国平均67.8%)
《地域や社会をよくするために何をすべき考えることがありますか》 否定的な回答 57.1% (全国平均45.4%)

2.4 小規模校に求められる取組の目的

上記、2.1の最後の小規模校に求められることの3点と、2.3でふれた本校の課題を考察し、小規模校に求められる取組を設定する。小学校の教育課程の中から、これらのことと親和性が高い教科等を考えると、総合的な学習の時間が適当である。そのように仮定すると、小規模校には、体験活動・校外活動を効果的に活用し、児童が地域の人的・物的資源と主体的に関わり、社会性が涵養されるような総合的な学習の時間の実践の開発が求められていると考える。これらをもとに、取組の目的を次の2点とする。

- (1)体験活動・校外活動を効果的に活用し、且つ地域の人的・物的資源と主体的に関わる実践を開発する。
- (2)実践を通して、地域の人とのつながりを深め、地域や社会について考える児童を育てる。

3. 具体的な実践

具体的な実践(以下、本実践)として、映画制作プロジェクトに取り組んだ。映画制作とした理由は、映画制作を通じて、校内外での効果的な体験活動を行い、「児童が地域社会と主体的に関わるが見込まれること」と「児童が地域の人とのつながりを深めることが期待できること」である。本実践の概要は資料2のとおりである。

資料2 映画制作プロジェクトの概要

〈対象〉	本校の2020年度の6年生9名（男児7名、女児2名）
〈期間〉	2020年7月～2021年3月
〈内容〉	第1段階 プロジェクトの目的を決める 第2段階 目的にあった大まかなストーリーづくり 第3段階 脚本づくり 第4段階 映画撮影 第5段階 映画編集と広報・販売準備 第6段階 上映会とDVD販売 第7段階 プロジェクトの評価と寄付先の検討

4. 本実践の実際

4.1 地域のひとと主体的に関わった活動事例

児童が地域のひとと主体的に関わるために、児童を外部の人材とつなげ、活動を進める際に助言してもらったり、一緒に考えてもらったりするようにした。ここでは、第1段階(プロジェクトの目的を決める)を事例に述べる。

この段階では、映画制作自体が目的となってしまうないように配慮し、児童が適切な活動目的を設定できるよう、SさんとH先生に関わってもらった。Sさんは、本校出身の方で、本校のある地域に対して大変愛着をもってさまざまな活動をされている方である。また、H先生は、以前、6年生の児童と映画を作った経験がある先生である。

Sさんには、児童がどういう映画を作りたいのか、児童が地域の特徴をどうとらえているのかを引き出してもらった。次の日、H先生にはオンラインでのインタビューを行った。インタビューでは、今自分たちが考えていることを話し、それについての意見をもらった。H先生からは、当時の学級の児童がどのような目標をもって活動をしていたのか、どんな人に協力してもらいながら活動を展開したのかなどのアドバイスももらった。

これら一連の関わりを通して、児童にどのような考えの変化があったのか、女兒Aの振り返り(資料3、資料4)をもとに確認する。

資料3 Sさん授業後の女兒Aの振り返り

7月6日
(前略)「たんてい×ホラー」がいいと思ったけれど、いろいろと問題点がありますね。(中略)なのでしたら、事件の設定を「ホラー」にせずに、小さな事件にするしかないと思います。でも町の人に楽しんでもらうために、「たんてい」という物語は向いているのか、よくわかりません。みんなでいろいろ話し合って、進めていかなきゃ分からないことばかりになるので、みんなでしっかり話し合って決めていきたいです。

資料4 H先生インタビュー後の女兒Aの振り返り

7月7日
(前略)「たんていのジャンルをするのは難しい」とH先生が言っていました。なぜなら、役をするのが難しいからです。私たちは小学6年生なので、小6の役がやっぱりやりやすいのかもしれませんが。「本気で拍手されて感動させられる映画を作った」、H先生は、この目標で作ったそうです。私だったら「笑いもあり、感動させられる」という目標をつくりたいです。まず第1に目標をしっかり決めないとなかなか色んなことが決まりません。目標をみんなで決めたいです。

(下線、中山)

女兒Aは、Sさんとの授業で、「たんてい×ホラー」を作りたいという思いをもちつつも、それで町の人に楽しんでもらうという目標が達成できるのか、この時点ではわからないようだった。しかし、H先生から意見をもらった後は、「笑いもあり、感動させられる」という女兒A自身の目標が明確になっているのがわかる。この後、児童はそれぞれの意見を出し合い、それを集約していくなかで、「(加太の人に)加太のよさを再認識してもらおう」、「(加太以外の人に)加太の魅力を伝える」という、映画プロジェクトの目的を設定した。目的を考え始めた頃は単に「楽しんでもらうこと」にのみ意識が向いていた児童が、最終的には地域のよさを伝えるという方向へと意識が向いていた。この意識の変化は、H先生から具体的な事例をもとにアドバイスをもらったことが影響していたと考える。

第1段階以降も、児童は映画制作プロジェクトを進めるために、地域社会と主体的に関わった。その一部を紹介する。

第4段階(映画撮影)では、学校内外の人々に協力を依頼し、大勢の方に出演してもらった。地域のお年よりの方々とは、川のそばで会話を楽しむ地域の日常を撮影した(写真1)。また、児童が4年生～5年生のときに関わりのあった東京大学生産技術研究所加太分室の先生にも出演してもらった(写真2)。



写真1



写真 2



写真 5

第5段階(映画編集と広報・販売準備)では、映画上映会の案内ポスターをつくり、郵便局、飲食店等に掲示の依頼をして回った。

そして、第6段階(上映会とDVDの販売)では、保護者、Sさん、H先生、出演者の方々を始めとする地域の方が参会した(写真3)。そこでは、映画制作の過程や学習発表を行い、映画、NGシーン集、ドキュメンタリーを収録したDVD(写真4)の販売を行った。その際、映画制作プロジェクトの評価を行うために、映画についてのコメントを書いてもらう活動を行い、児童はたくさん声をかけてもらうことができた。上映会後は、制作に協力してくれた方々にDVDをもってお礼に行ったり(写真5)、DVDを購入してくれた方に届けに行ったりもした。



写真 3



写真 4

4.2 地域の「もの・こと」と関わる展開

本実践では、児童が地域のさまざまな「もの・こと」と関わるができるように、第2段階(目的にあった大まかなストーリーづくり)を工夫した。ここでの具体的な工夫とは、映画のストーリーを地域とのさまざまな関わりが生まれる物語の設定にしたことである。ここでは、その段階の詳細を述べる。

この段階では、子どもたちは、最初にどのような手順で活動を進めるのかを話し合った。話し合った結果、まずH先生からアドバイスをもらい、次に自分たちでストーリーを考え始める。そして、H先生やSさんからアドバイスをもらいながら、最後は自分たちでストーリーをまとめるという予定を立てた。

まず、H先生に意見を求めると、町の魅力についてインタビュー調査を行うようにアドバイスをもらった。そのアドバイスをもとに、5年生のときのインタビュー調査の結果を振り返ったり、Sさんに聞き取り調査を行ったりした。Sさんには、この後、大まかなストーリーを考える際に何度も来てもらい、児童に助言してもらったり、一緒に考えてもらったりした(写真6)。



写真 6

児童がSさんとのやり取りを通じて考え出したストーリーは、海洋プラスチックゴミ問題の研究をしているお父さんの仕事の関係で、架空の海沿いにある町(「加太」を想定しているが、映画では「美海町」)に、都会から主人公が転校してくるといものである。転

校生がやって来るという設定にすることで、転校生の目にはこの町がどのように映るのか、転校生はこの町をどのように感じるのかを考えることができた。ストーリーづくりの過程では、元気なお年よりの多いこと、海や夕日がきれいなこと、紀淡海峡の中央に位置する島にたくさんの漂着ゴミが流れ着いていることなどの地域の要素を確認していくとともに、登場人物・物語の設定やロケ地を考え出していった。このような要素が取り入れられたストーリーにすることで、自分たちが生活している地域の「もの・こと」とのさまざまな関わりが生まれる映画制作へと展開することができた。

5. 本実践の考察

本実践の成果として、まず、児童の振り返り「映画制作で得たあなたの宝物は？」を示す。(資料5、3月3日振り返りより抜粋)

資料5 「映画制作で得たあなたの宝物は？」

女兒A	「人とのかかわり」です。(後略)
女兒B	私がこの活動で得た宝物は、加太の温かさです。(中略)改めて今、映画制作という活動ができて加太の温かさに気づけてよかったと思います。私はこの活動を通してもっと加太に関わりたいたいと思いました。
男児C	映画制作で得た多くの宝物は、加太の人との関わり、温かさです。(後略)
男児D	宝物は、加太の町の人、町以外の人との関わりだと思います。(後略)
男児E	ぼくがこの映画制作で得た宝物は、1つあります。それは、人との関わりです。(後略)
男児F	ぼくが、映画制作の活動で得た宝物は、2つあります。宝物の1つ目は、Sさんと関わったことです。(中略)2つ目の宝物は、ぼくが作った映画です。(後略)
男児G	映画制作の活動で得た自分の宝物は、いろいろな人と関わったことです。(中略)映画制作をする前は、(地域の人と)軽くあいさつだけで、話をするがありませんでした。だけど撮影が始まって、よく会うようになりました。なので、軽くあいさつするだけが、今はよく話すようになりました。(後略)
男児H	ぼくは、この活動で得た宝物は人との関わりです。(後略)
男児I	ぼくが映画制作で得た宝物は、2つあります。1つ目は、人との関わりです。(中略)2つ目は、地域の人とのあたたかさです。(後略)

ここでは、「映画制作で得たあなたの宝物は？」に対して、「人との関わり」や「人の温かさ」を挙げている児童がほとんどであった。女兒Bは、「人の温かさ」を

感じている部分は同様ではあるが、最後は、「この活動を通してもっとこの地域に関わりたい」という思いで締めくくられている。

次に、本校の課題に関連する部分の成果として資料6を示す。

資料6 本校児童の回答の変容

<p>平成31年度「全国学力・学習状況調査」 児童質問紙より(再掲、2019年4月18日実施)</p> <p>《今住んでいる地域の行事に参加していますか》 肯定的な回答 100% (全国平均67.8%)</p> <p>《地域や社会をよくするために何をすべき考えることがありますか》 否定的な回答 57.1% (全国平均45.4%)</p>
<p>令和2年度「全国学力・学習状況調査」 児童質問紙より(2021年3月12日実施)</p> <p>《今住んでいる地域の行事に参加している》 肯定的な回答 約77.7% (7人) 否定的な回答 約22.3% (2人)</p> <p>《地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある》 肯定的な回答 約88.9% (8人) 否定的な回答 約11.1% (1人)</p>

ここでは、「地域社会をよくするために何をすべきか考えることがある」の項目において、肯定的な回答をしている児童が9割近くとなった(資料6)。成果の最後として、写真7を示す。



写真7

児童は映画を通じてつながったSさんのお店に授業外でも時々行くようになっている。そして、そこを訪れる他のお客さんとも映画を通じてつながっていることが、Sさんからいただいたメッセージと添付されていた写真からわかる。また、先に示した資料5の男児Gの振り返りからも映画を通じた日常的なつながりがあることがわかる。

上記の成果から、本実践を考察する。本実践は、小規模校には、体験活動・校外活動を効果的に活用し、

児童が地域の人的・物的資源と主体的に関わり、社会性が涵養されるような総合的な学習の時間の実践の開発が求められていると仮定した。その上で、「(1)体験活動・校外活動を効果的に活用し、且つ地域の人的・物的資源と主体的に関わる実践を開発する。(2)実践を通して、地域の人とのつながりを深め、地域や社会について考える児童を育てる」を目的に実践的研究を行った。その成果として次の4点があったと考える。

- (1)映画制作活動では、自分たちの活動を進めるためにロケ地や出演等で交渉や依頼が必要となり、地域社会と主体的に関わることができた。
- (2)児童は「転校生もの」の物語設定を考えることを通して、自分たちの住む地域社会を「外の目」で見つめることができ、その価値を再認識した。
- (3)映画制作の各段階で必要となる人を、児童とつながりのある人を中心に選ぶことで、児童は地域の人とのつながりを深めることができた。
- (4)映画制作を通じて地域の方と日常的なつながり、授業の枠をこえたものとなっている。

(以上、中山)

6. 本実践の今日的意義

小規模校は決して教育力が乏しくただちに統合の対象としなければならないものではなく、その教育活動の「可能性」は通常規模の学校以上に満ちていることが、上記の「4. 本実践の実際」と「5. 本実践の考察」から明らかとなっている。ここでは、中山の総合的な学習の時間の実践を5年生段階の「元気☆海洋環境プロジェクト」から追っていた谷尻が、本実践の今日的意義を3点にまとめて述べたい。

(1)地域資源のフル活用

まず、本実践は郷土の資源を最大限生かした教育活動であり、久保が提唱した「自然環境・歴史的・文化的環境などの地域資源(人材を含めた)をフルに活用する教育課程づくり」を見事に具現化したといえる。

地域の魅力の再発見と地域の人たちとのふれあいを通じて生まれた地域愛を基盤に、「地域人材の効果的な参画」というレベルを越えた、児童と高齢者を含めた地域で生きる人たちの人間的な温かい関係性が生まれている。

(2)探究の魅力に満ちた教材＝「映画制作」

映画「僕らの街」の制作は撮影の場面ひとつをとってみても、多種多様な任務(監督・カメラ・音声・照明・役者など)が同時並行で果たされなければ進行できないものである。映画制作という創造性の高い活動において、ひとり一役以上の役割を担ったことによって、児童は主体的に関わらざるを得ない状況に置かれた。そのことにより、責任の自覚が生まれ、最終的には普通の学校生活では得られないような高い達成感と周囲からの承認による自己肯定感の高まりがあったとみら

れる。

「ストーリーはどうするのか」「役者はこの場面でもんな心境であるからどのように演じるのか」「カメラアングルはこれで良いのか、音声はうまく拾えているか」など、次々と現れる壁(課題)を教員と児童が共に悩みながら打開策をたて、実行していった。学びがスパイラル的に発展していくという探究的な学習の過程を着実に踏んでいくこととなった。

さらに、「僕らの街」は映画としての完成度が高く、単体の鑑賞も可能なレベルに到達している。DVDを製作し販売する(購入側からすると対価を払って購入するだけの価値がある)まで、児童が主体的にやりきった。このゴールが設定されていたことも、最後までよりよいものを創りたいという児童の意欲につながっている。

(3)生活指導・集団づくりの側面

この学級の児童は小学校入学以降、わずか10名ほどの小集団を基盤に5年間の学校生活を送ってきた。閉鎖的な人間関係に陥りがちだった集団が、地域の大人が関わることで、次第に開かれた集団になり、個々の人間関係に変化が生まれている。筆者は5年生段階でもこの学級の様子を間近に観察する機会を得ていたが、映画制作中の撮影場面では、笑い声が絶えず、教師の指示を待たずに主体的に動く児童が多くいた。また、その動きも協力的で温和的でもあった。映画制作の過程で、児童の関係性に変化と深化が生まれたといえよう。これは映画制作が児童の社会性の涵養に大きくつながったものである。

また、孤立しかけていた転校生が、地域の人や同級生たちの温かな関わりを通じ、海洋問題に取り組んでいる父親の仕事の価値や同級生たちの温かな人間性を再発見し勇気を得る。このストーリーが、期せずして「思春期の自立の模索」となっている。内なる自立への欲求や自己認識が脚本制作の過程でこのようなストーリーを生み出したと考えられる。

以上、3点にわたって、本実践の今日的意義を整理した。

ところで、本実践を可能にしたのは、実践校が長年地域と連携した活動を行ってきたことが背景としてあげられる。しかし、マンネリ化しやすい行事的活動を打破できたのは、中山の指導力が大きいと言わざるを得ない。

中山は総合的な学習の時間の実践的研究を長く続け、人的ネットワークを広く持つと共に、自らの探究心で「何が有効な学習教材となるのか」を模索し続けてきた。実践の中で紹介されたSさんとH先生は、それらの人的リソースの一部に過ぎない。リソースを活用して、またスキルを磨きながら学習活動は展開された(本実践の場合は、脚本制作やカメラなどの機器を用いた撮影、編集のスキル等を含む)。最大限の効果＝良い学

びを創り出したいという教師の意欲が、児童の内的欲求とマッチしたのが本実践であることは付記しておきたい。

本実践は、同時に小規模校の「可能性」がこれほど高いということ、地域と連携・協働できればこのような質の高いダイナミックな学びが可能であることを事実として示したことに大きな価値がある。そして、少子化が進む中での日本の学校づくりの在り方にも貴重なヒントを与えたといえよう。

(以上、谷尻)

注

- 1) 従来の通学区域を残したままで、特定の学校について、通学区域に関係なく、当該市町村のどこからでも就学を認め

る特認校のうち小規模校において取り入れられている制度

引用文献

- 1 川上泰彦「地方教育委員会の学校維持・統廃合に関する経営課題」『日本教育経営学会紀要』第57号、2015年、p.186.
- 2 加藤崇英「人口減少社会における学校規模の多様性と学校経営」『学校経営研究』第40巻、2015年、p.43.
- 3 文部科学省ホームページhttps://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf(最終閲覧日2021年8月29日)
- 4 文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」2015年、pp.33-36.
- 5 久保富三夫「小規模特認校制度の教育的意義」『人間科学研究年報』2015年、pp.32-46.